

ハダニ類

発生生態と被害

野菜・花き類で大きな被害を与えるハダニ類は、黄緑色のナミハダニ（写真1）と赤色のカンザワハダニ（写真2）が主体である。両種ともに寄主範囲が広く、多くの農作物や雑草に寄生する。このため、ほ場周辺にハダニ類の寄主植物があるとそこで繁殖し、ほ場に侵入してくる。両種ともに低温短日条件において成虫態で休眠するが、加温施設では休眠しない。

ナミハダニはインゲンマメを寄主とした場合、卵から産卵までの発育期間は27℃で10.5日で、産卵数は100卵を超えるとされており、条件が良ければ冬期でも急激に増殖する。

葉裏に寄生することが多く、葉面からの吸汁により被害が生じる。吸汁加害を受けた葉表側には、白っぽいかすり状の被害痕が現れることが多い（写真3）。寄生数が多くなると葉全体が生気を失うとともに、ハダニ類の吐糸によりクモの巣で覆われたようになって萎縮（写真4）し、枯死することもある。

防除対策

- (1) 苗からの持ち込みや、前作からの持ち越しを防ぐ。
- (2) ほ場（施設）周辺やほ場内の雑草が発生源となる場合があるので、除草対策を徹底する。
- (3) ほ場をよく観察し、発生初期に殺ダニ剤を散布する。
- (4) 殺ダニ剤を散布する場合、株が混んでいると薬剤がハダニ類の寄生部位に到達しないため、摘葉等を行った後、丁寧に散布する。
- (5) 特にナミハダニでは、殺ダニ剤に対する薬剤抵抗性が発達して効果が十分でない場合がある（表1）。殺ダニ剤散布の2～3日後に効果を確認し、生存虫が見られる場合には、別系統の薬剤を散布するなど適切に対応する。なお、薬剤抵抗性の発達を避けるため、同一系統の薬剤は、年1回の使用にとどめることが望ましい。



写真1 ナミハダニ雌成虫



写真2 カンザワハダニ雌成虫



写真3 イチゴ葉縁部のかすり状の被害痕



写真4 多発したナミハダニの吐糸によりクモの巣状となったイチゴ株

表1 ナミハダニに対する殺ダニ剤の効果

供試薬剤	イチゴ 2008年 防除所	イチゴ 2013年 防除所	イチゴ 2015年 防除所	イチゴ 2018年 防除所	イチゴ 2022年 防除所
アグリメック	—	—	—	◎	◎
アーデント水和剤	—	△	—	—	—
アフーム乳剤	◎	—	—	—	—
カネマイトフロアブル	◎	◎	○*	◎	○
グレーシア乳剤	—	—	—	—	○
コテツフロアブル	—	△	—	△	—
コロマイト水和剤	◎	△	△*	○	○
スターマイトフロアブル	—	—	△*	—	○
ダニオーテフロアブル	—	—	—	—	◎
ダニサラバフロアブル	—	○	△*	△	—
ダブルフェースフロアブル	—	—	—	△	—
ニッソラン水和剤	—	—	—	—	—
パロックフロアブル	—	—	△*	—	—
ピラニカEW	—	△	—	—	—
マイトコーネフロアブル	○	◎	◎*	◎	◎

注1) ◎：効果高い、○：効果が劣る場合あり、△：効果が劣ることが多い、—：未検定

(◎：すべての個体群で死虫(卵)率90%以上、○：死虫(卵)率90%以上の個体群が5割以上、△死虫(卵)率90%以上の個体群が5割未;

注2) ※は、殺卵効果を検定。